

歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第四巻「近現代編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」、第九巻「絵図・要覧編」は、教育委員会や各公民館などにおいて、一冊四、〇〇〇円で好評販売中です。ぜひともお買い求めください。

昨年三月に『近江日野の歴史』第四巻「近現代編」を発売して以来、近現代の日野の姿を様々な視点から紹介しています。今回は明治から戦前の農家副業について取り上げます。

農家の副業

明治時代、日野の農家は主に米を作っていました。そのかわり副業もしていました。明治十年代初めにつくられた「滋賀県物産誌」にはさまざまな農家副業が見られます。日雇い、大工、左官、運送業、飲食業、桶職、小売商など、このほか山地に近い村では薪採りや炭焼きが行われていました。

これらの農家副業の中でも明治前期に盛んだったのが製茶です。茶は古くからの日野の特産の一つですが、「滋賀県物産誌」には日野周辺では明治以降に栽培をはじめた町村も多いとあります。明治十年代初めには現日野町域の約八割

の町村で製茶が行われていました。販売先は日野市街が多く、甲賀や伊勢などにも売られています。しかし、明治後期には新興の生産地におかれてしまっています。

製茶にかわって明治中期以降、発展するのが養蚕です。明治二十三（一八九〇）年に日野製糸株式会社が発設されると、大窪では町内に養蚕を奨励し、日野製糸株式会社に補助金を出すなど養蚕製糸に力を入れています。その後、明治四十五年（一九一〇）年に日野町養蚕組合が設立され、昭和の初めには蚕種の統一、繭の共同販売、共同桑園の新設を行うなど改善をはかっています。昭和六（一九三二）年ごろからは「養蚕業に関し組合員の共同の利益増進を図る」ために現日野町域の町村に養蚕実行組合が設立されています。現日野町域の養蚕は大正後期に生産量のピークを迎え、戦前まで農家副業の第一位でした。

上駒月の筵

農家副業のなかでも南比都佐村とりわけ上駒月で盛んだったのが筵織りです。江戸時代の延宝年間（一六七三〜八一）から始められたとされ、「滋賀県物産誌」にも上駒月・下駒月・迫の農家副業に筵織りが載っています。筵は敷物や穀物の乾燥、日よけなどに使われました。明治五年の取調書によると次のようにつくられました。まず、藁をより合わせて縄をつくる。それを四本そろえて織り機にかけたて糸とする。一人はイサシ竹という竹製の細長い器具を用いて、横からよこ糸用の藁を差し入れる。もう一人は箆を上から下におろして編んでゆくというものです。約一×二メートルの大きさのものが一日平均四枚織られました。明治五年の生産量はわかりませんが、明治二十五年の記録によると年間五万一〇〇〇枚が上駒月で

生産されていたことがわかります。その後、足踏み式の一人織り機や、縄を作る機械が入り、生産量は大きく伸びました。

筵織りの特徴は女性の仕事だったことです。昭和十八年十二月一日の『滋賀新聞』の記事によれば、南比都佐村では生産された筵二〇万枚のうち十六万枚を上駒月の八六戸の農家で生産しており、筵を織る女性たちは、ほぼ一年中、朝早くから午前中まで筵を五、六枚織り、午後は田んぼの仕事や家事をこなしていたとあります。この筵織りは昭和三十年代に筵の需要が大きく減るまで続けられました。



▲筵を織る女性